

瑠璃

へりり

若泉真樹句集

「真樹さんの句は、根源的に持っている知性や理性の本質と、それに対極する感性が共存し、新しい感性の世界を感じ、ものの風景が、彷彿として浮かぶ作品が多くなってきたような気がする。しかもその風景は、深く、哀しく、愛おしく、いまを生きているという、繊細な感性が美しく感ぜられるのである。

相馬 要（「序」より）

第一章
細雪

—平成一年秋—三年夏—

放たれて矢は黄落の的の中

球型の鏡や秋思凝縮す

大きめの袋月夜の雲詰める

星さがしいて胸中に流れ星

街の灯の幾何学模様黒葡萄

あと少し鷹待つ渚文庫本

鷹を待つ青年長い足組んで

私はピエロ喜怒預けおく冬薊

時雨忌や魚のまあるい視野の中

首欠けの羅漢へ鶉の声しきり

第二章 浮力

—平成三年秋～六年初秋—

反故にした約束みずきの実の赤し

銅鐸を鳴らし彌生期の秋へ

黄落の端へ農家の移築さる

野ざらしの石棺に触れ雁渡

夕映えを盗みて昏れし箒草

月光の中で積木を積む少女

第三章
方便

—平成六年中秋～八年—

家中に父の
躑音星月夜

曼珠沙華首の
回りがたよりなく

やさしい嘘櫻紅葉の散る小径

コスモスの風も鳥獣保護区なり

十三夜踏絵のような会話して

どんぐりと風を供えし師の遺影

烏
瓜
極
太
の
万
年
筆
遺
す

お
も
し
ろ
の
世
や
黒
猫
に
初
時
雨

白鳥の空に触れんと手をのばす

あんみつを男も食べる古都の冬

第四章
有為

—平成九年～十年—

春の砂山足裏にもある不惑

芽木の風漁港雑多にも置く

探梅や帯をゆるめに向き合えり

斌雄忌や二椀の潮汁つくる

流木の朽ちる歲月春の鷗

受話器から訃報それから沖おぼろ

花冷えの海の瑠璃色ハーブテイー

歩いてゆける距離に死があり夕櫻

仮契約さくら吹雪に背を押され

菜の花の沖に巨きな月がある

濁世見て見ぬふりをする瑠璃蜥蜴

句集 瓊 璃



発行 平成十六年六月十八日

著作者 若泉真樹

発行者 田口恵司

発行所 株式会社 角川書店

〒107 東京都千代田区富士見二一三三

電話 (〇三)三三一七七八五三六(編集)

編集制作 株式会社 角川学芸出版

印刷所 株式会社 熊谷印刷

製本所 株式会社 鈴木製本所

© Maki Wakaizumi 2004 Printed in Japan
ISBN4-04-651763-8 C0092